

[拠点形成概要及び採択理由]

機 関 名	京都大学
拠点のプログラム名称	知識循環社会のための情報学教育研究拠点
中核となる専攻等名	情報学研究科社会情報学専攻
事業推進担当者	(拠点リーダー) 田中 克己 教授 外17名
<p>【拠点形成の目的】 本拠点がカバーする学問分野は、情報学における、知能情報処理、ヒューマンインターフェイス、情報検索、アルゴリズム理論、人文社会情報学などである。本拠点形成の目的は、「知識循環社会」を支える情報科学技術の研究を通じて当該分野の人材育成を行う国際的な教育研究拠点を形成することである。21世紀COEプログラムの成果をさらに国際的に展開し、「知識循環する社会を拓く情報科学技術」の教育研究に目標を絞って、多領域の融合により生まれた京都大学情報学研究科を中心に、新たな学問分野の開拓を目指す。</p> <p>情報科学技術の進展により、社会基盤としての情報システムが整備される一方、人間・機械（情報機器やロボット）のインターフェイスのあり方、信頼性の乏しい知識にもとづく行動の危険性、社会情報システムの脆弱性など、多くの技術的・社会的課題が表面化するようになった。これらは、情報科学技術と人間・実社会の乖離により、知の循環が滞ることに起因すると考えられる。情報が知識となり、さらに、知識は他の知識と連携し循環することにより有用なものになる。社会・コミュニティ・組織・個人の間で、知識が滞りなく循環することを促すためには、従来の工学的的方法論だけでは行き詰まりがある。機能分割による研究チームを形成してもこれらの課題の解決は望めない。情報学と隣接領域の融合チームを編成し、新たな研究の方法論を求めていくことが重要である。</p> <p>【拠点形成計画の概要】 知識循環を促進するための核となる情報科学技術で重要なものは、知識伝達のためのヒューマンインターフェイス、知識探索、実フィールドにおける知識共有を基盤とするコラボレーション、および、これらを高速高信頼で支える計算基盤であるにとらえ、これらの教育研究を、(1)情報学・脳科学・生命科学、(2)情報学・管理科学・知財学、(3)情報学・実社会フィールド(4)アルゴリズム理論・高速計算基盤のそれぞれの連携に基づいた「原初知識モデル」、「知識サーチ」、「フィールド情報学」、「知識グリッドコンピューティング」という新しい教育研究コアを設置して推進する。</p> <p>原初知識モデル教育研究コアは、コミュニケーションにおける知識モデルを探求し、一層の人間理解にもとづくヒューマンインターフェイスや知識創成について教育研究を行う。知識サーチ教育研究コアは、種々の情報資源から信頼出来る知識を探索(サーチ)する新しいサーチエンジン技術と、これに関連する社会制度・ビジネスモデルの教育研究に焦点をあてる。フィールド情報学教育研究コアは、フィールドとのコラボレーションに基づく社会情報システム構築の方法論の教育研究に焦点をあてる。さらに、これらを支えるための高速高信頼な計算サービス基盤の構築に焦点をあてた知識グリッドコンピューティング教育研究コアを設置する。これらのコアを相互連携させる形で、「知識循環を促す情報科学技術」に関する世界最高水準の国際教育研究拠点の形成を目指す。</p> <p>人材育成については、21世紀COEプログラムで高い評価を得た「若手リーダーシップ養成プログラム」や「複数アドバイザー制度」の充実と国際展開、若手研究者の共同研究を推進する海外拠点の整備充実に加えて、優秀な海外博士留学生の経済支援などを行う。主なプログラムは以下の通りである。</p> <p>① 提案公募型若手リーダーシップ養成プログラムとその国際展開 学内の助教、ポスドク、博士学生に加え、海外の若手教員・博士学生・ポスドクも対象にして、研究プロジェクトや国際ワークショップ開催などを競争的に提案させ、事業推進担当者やアドバイザーのもとで遂行させることにより、リーダーシップと国際的な人的ネットワークを有する人材の育成を図る。学外の学識経験者、企業、NPO・NGOなどを加えた開かれた委員会で審査する。</p> <p>② 戦略的コミュニケーションスキル(英語・日本語)向上セミナー 若手研究者に必要なコミュニケーション能力の向上を目的として、助教、ポスドク、博士学生を対象として、日英両国語によるプレゼンテーションや交渉の訓練やカリキュラム開発を、すでに連携実績のあるベルリッツ、NHKなどと協力して行う。</p> <p>③ 複数アドバイザー制度の国際展開・社会展開 博士学生に対し、指導教員以外の国内外の複数の教員・研究者、フィールドの専門家などにアドバイザーとして研究指導を依頼し、研究評価を多面的に行える人材の育成を行う。</p> <p>④ 海外拠点の充実と博士留学生経済支援プログラム 21世紀COEでも実績をあげた、米国拠点や中国・タイ等のアジア拠点の整備を図るとともに、国際共同研究先(米国、中国の大学・企業研究所など)への助教・ポスドク・博士学生の派遣(海外インターンシップ)、および、海外からの博士留学生・ポスドクの招聘・経済支援を行う。このプログラムとは独立に、博士学生の経済的支援のため、RA任用予定数を21世紀COEから倍増する。</p> <p>⑤ 各教育研究コアにおける融合型プロジェクト 例えば、知識サーチ教育研究コアでは、情報検索・情報分析の教育研究に知財やマネジメント、サービスサイエンスの専門家が参加する分野融合型プロジェクトを実施する。</p>	

機 関 名	京都大学
拠点のプログラム名称	知識循環社会のための情報学教育研究拠点
<p>〔採択理由〕</p> <p>知識循環社会のための情報学を目指す世界的教育研究拠点として、独創性と信頼性の高い将来構想になっており、これまでの教育研究活動や国際展開の実績も高く、計画全体が時代の要請に応える優れたプログラムである。</p> <p>人材育成面においては、国際性を醸成する大学院生教育を推進してきた実績を有しており、これを基盤として、独創性、国際性やリーダーシップを備え、他分野展開へのポテンシャルを持つ人材の育成を目指した教育体制の構築が計画されている。特に、英語による研究発表能力の教育を具体例としたコミュニケーション能力の向上など、具体的計画が明確である。今後のより良い教育拠点形成に向けて、RA支援をはじめとする大学院生支援の充実が望まれる。</p> <p>研究活動面においては、21世紀COEプログラムの成果を基盤として、知識循環を推進する情報学を、原初知識モデル、フィールド情報学、知識サーチ、知識グリッドコンピューティングからなる多層構造で扱うバランスの取れた提案であり、この分野の今後の方向性を示す研究拠点形成計画となっている。特に、「フィールド情報学」「信頼性」という今後の情報社会の健全な成熟への重要課題を盛り込んだ点は、高く評価できる。今後は、4つの研究層の具体的な連携体制、知識循環の具体的な姿を、より明確にし、成果の具体例の明示を期待したい。</p>	